

第5回 北海道の歴史文化施設活性化に関する懇談会 意見概要

- 百年記念施設の継承と活用に関する議論を進める際には、十分な情報共有をした上で、どの段階が相応しいかは別として、若い人の意見をプロセスの中で聞いてみたい。
- 次世代を担う若い人の意見は有効であり貴重だと思う。例えば、百年記念施設近郊の大学の学生の意見等を聞くとか。
- 学生の協力を得る場合、漠然とアイデアを出しなさいということではなくて、単位を取れるとか、レポートを出さなくてはいけないなど、しっかり評価される、真剣になるような動機付けを考えてもらいたい。
- 博物館や開拓の村で受け入れている大学の博物館実習生のカリキュラムの中で、討議する場や意見等を聴取する機会を与える方法もあるような気がする。
- 百年記念塔の危険性をどのように周知していくのかという方策を視野に入れて動かないと、あの建物の危険度は伝わらないだろうという危機感を持った。
- 「これをやると単位が取れる。」というのは、一生懸命に頭を活性化する瞬間だと思う。それをやるのであれば、上の方（包括連携協定等）からやるのと同時に、どの教授や准教授がやるのかということもはっきりと見つけて、熱意を込めて、これをやろうという人間を内部で探して行かないと、なかなか形にならないかなと思う。
- 百年記念施設の継承と活用に関する考え方を読むと、それぞれについては、的を得ているが、踏み込みがちょっと弱く感じる。
- 百年記念施設の今後について「新しい姿」を「再生」として捉えるのであれば、これから担う若い世代の方々の意見等が反映された、今後の在り方が必要である旨の文言を付け加えることが望ましいと感じる。
- 百年記念施設の継承と活用に関しては、修学旅行生等が記念塔に行くことを義務化してみるという手もあると思う。学校教育として義務化。遠足や修学旅行は、必ず記念塔を訪れる。忘れていないか。ということ義務化した方が良く思う。
- 上ったり、近くに寄ったり活用しないで、あれは景観のままあるべきだという意見もきっと出てくる気はする。
- 記念塔が危険だと解るような、景観に合うきちとした柵を作って、感じの良いものに切り替えていけば残しても良いのかなとは思ふ。
- 炭鉱の関連施設に立坑櫓というものがあって、朽ち果ていて補修が必要だし、危ないとして立入禁止のものもあるが、その町の人たちがいろんな資金を集めながら、補修や夜間照明をし、美的なところを出しながら見てもらおうという運動を実際やっている。そのような例からすると、記念塔を維持できないことのないのではないかなという気はする。
- 現在、百年記念施設の管理は指定管理者が行っているが、今後の施設保全や利活用によっては、指定管理者の業務内容や役割は、現行の要求水準を超えたものとなり、ますます指定管理者の弾力的な活動が求められるような気がする。

- 副題となっている「体感交流空間としての再生」という言葉がとても良いと思う。生涯学習の組み立てができるし、観光もできる、産業観光にもなる。
- 開拓の村の展示建造物に、より生活感を表すことができれば、利用者はそこに親しみを持つ。そこで羊羹を売っていれば買う。そのような雰囲気作りが大切。ハードのものを見せて、説明をして、「はぁそうですか」と言って帰ると、そこに息づく何かがあれば違う。
- 徳島県には、古民家がぽつぽつ斜面に建てられている場所がある。夕食や朝食には火は使えないが、近所の方々がチームを組んでケータリングをしている。朝の7時ぐらいになったら、「はい、お食事」と持ってくる。そのようなことになると、古い建物に泊まれて雰囲気も良い。ああいうイメージからいくと、そこで火を使えるとか使えないとかいう以前に、そういった方法もあるかなと思う。そうすると結構おもしろい。
- 宿泊事業を行うためには、職員の育成、採用の方法も検討が必要。やはり、ある程度、処遇も考えたうえで職員を見なければ、事業や今後の展開に関しても、ベースができないというのが現状。現在、所属する職員も、腹を括って、何時でもという気持ちはあるが、一方、ボランティアさんや学生さんの力を借りるなどの方法もあると思う。
- 開拓の村は、歴史を学び生活を体験できる施設であり、様々な体験事業を行っている。以前は子供たちの宿泊体験も行ってた。しかし、現行の指定管理者制度では、4年間という指定管理期間により安定したサービスの提供、体験事業の継続性、また施設運営のベースとなる配置職員の処遇問題、学生・ボランティアとの協働の持続性など、現実的に様々な問題があり、限界を感じる。